

り学芸員だとか行政の文化担当といったものがあ

るわけですが、それだけではないポテンシャルも確実にあるし、そこをアピールしていかなきやいけないなど。

島村 あとは単純に、民俗学をやっていると毎日が楽しいですね。

菊地 そうですね。人間のいる世界であればどこでも——観光地でも何でも無い、ふつうの人々の生活圏を見ているだけでもいろいろ気づくことがあって、退屈しない。毎日『プラタモリ』みたいな感じですよ。

島村 質的調査における「半構造化インタビュー」という言葉がありますが、民俗学の調査というのはむしろ「反構造化」だと思います。ぶらぶら歩いていたらたまたま何か見つけてしまう、というたぐいのもの

です。そうして歩き続けていると、偶然の発見がどんどんつなげていく——自分のなかでもそうだし、過去（歴史）とのつながりや地域間のつながりも見えてきて、浮かび上がってくるものがある。そこが民俗学の楽しさですね。そしてその楽しさを味わうためには、歩き続けていないといけない。先ほど回遊性と言いましたが、止まるとダメなんです。

菊地 そういう楽しさを知っている人が世のなかには意外とたくさんいるんだな、ということを知ったのはやはり「writer」でしたね。無常くん（副書記）（@mujo_kun）さんとか、副主席（@SHI_Jou）さんとか、幣東（@goshincho）さんとか、この方は何をして暮らしているんだろう……と不思議

になるくらい、毎日いろいろなところを歩いている人がいる。野を歩く人というのは民俗学者だけでなくいたるところに無数にいて、そういう人たちもっと生産的な、つまりその知見を一方的に収奪するのではないような共生関係を結べるといい。それはまさに戦後、民俗学がアカデミク化していくなかでうまく関係を結ばなくなった相手でもあると思うのですが、初期の民俗学はそういうところとむしろより接点をもっていたはずで、そのあたりも含めて民俗学をめぐるさらに豊かなエコロジーを作ればと考えています。

（きくち あきら・民俗学）

（しまむら たかのり・民俗学）

——三月九日、京都大学薬友会館にて収録

特集*民俗学の現在

実践としての「介護民俗学」

六車由実

1 「介護民俗学」の始まり

私が、大学の仕事を辞め、高齢者の介護施設で介護職員として勤務し始めたのは二〇〇九年五月のこと。慣れない仕事に戸惑いもあったが、その中でも私の心の支えになったのは、施設の利用者たちが語ってくれる思い出話だった。関東大震災での体験を語ってくれる明治生まれの方、秋山郷で炭焼きをしていた両親に育てられた方など。彼らの話に民俗学を専門としていた私の心は強く惹きつけられ、仕事の合間にメモを取りながら聞き書きをし始めた。

一つ一つの言葉に驚きながら熱心に聞く私に対して、利用者たちも一生懸命話を聞かせてくれた。「自分はどう何の役に立たない。この世は生き地獄だ」と老いていくことへの不安を感じ

じ、生きることに絶望している方も、聞き書きをさせていただけだと、表情は一変し、活き活きと目を輝かせていった。もちろん、その時の心持ちが常に継続するわけではなく、次の日にはまた絶望感と喪失感で顔を曇らせてしまうのだが、それでも、昔語りをしている時間だけは喜びを感じ、自分の人生を肯定してくれている、それを大切にしたいと思った。

そこで、私は、介護現場での聞き書きの実践を「介護民俗学」と名付け、民俗研究者が介護の現場に身を置いた時に見えてくるものは何か、そして民俗学は介護の現場で何ができるのかを考え始めたのであった。

2 テーマなき聞き書きの可能性

まず、民俗学にとっての介護現場はどんな可能性があるのか。

者（聞き手）と調査対象者（語り手）とは、アカデミックな知識はあっても、実際の経験やそれに基づく民俗的知識を持っていない聞き手が、それらを豊富に身につけている語り手に、その経験を「教えてもらう」という関係にある。

介護現場でも、支援を目的とせず、民俗学的関心のもとに、利用者の経験を「教えてもらう」という立場で聞き書きをする時、「介護される側」である利用者として「介護する側」である介護職員（私）との関係は、「教える側」と「教えられる側」とに変化していった。聞き書きをしている時に利用者の表情が活き活きと輝いていくのは、常に受動的な「される側」にあった利用者が、「教える」という能動的な立場に立つ場面を持つことによって、これから生きていくための意欲を取り戻してきているからなのではないかと思う。

4 一対一の聞き書きから開かれた聞き書きへ

このように高齢者施設での聞き書きは、民俗学にとっても、介護現場にとっても可能性に満ちており、私は、民俗学の研究者や民俗学を専攻した学生たちが介護の現場に是非入って聞き書きをしてもらいたいし、高齢者施設で働く介護職の方たちにも、民俗学に関心を持って利用者への聞き書きを行ってほしいと、二〇一二年刊行の拙著『驚きの介護民俗学』で呼びかけた。

「俺の宝だ」と喜んでいたり、利用者が亡くなった際には、家族がお通夜で『思い出の記』の一部を読み上げてくださったりもした。

ただ、聞き書きを『思い出の記』にまとめる作業は、介護の仕事の合間に行うために、一冊まとめるのに三ヶ月から半年程の時間がかかった。かなりの時間と労力が必要であったため、他の職員へも聞き書きを広めていくというのは難しかった。また、個室で行う一対一の聞き書きは、対象の利用者と聞き手である私との関係を深めていくことにはなっても、それが他の利用者や職員との関係の変化へと繋がっていくことにはならなかった。

その後、私は、現在勤務している「すまいるほーむ」という定員一〇名の小規模のデイサービスの管理者・生活相談員になった。だが、管理者としての事務的な仕事や生活相談員としての利用者や家族の相談業務に加え、小規模であるがゆえに介護職員の人数も少ないので、送迎や入浴、排泄、食事等の介護の仕事も兼務しなければならず、以前の大規模施設の一介護職員の時とは比べ物にならない程に多忙になった。そのため、個室で一対一で聞き書きを行う余裕は時間的にも精神的にも全くなくなってしまうのである。

そこで苦肉の策として始めたのが、昼休みや午後のレクリエーションの時間に、みんなが集うダイニングで、一人の利用者に聞き書きをするということだった。最初は、利用者たちも、

あれから一二年が経つが、民俗学の側からは、『現代民俗学入門』の中で「介護民俗学」が取り上げられ、「現代における福祉やケアの問題をどのように考えることができるのかは、現代民俗学の最前線の論点である」と評価していただいた。また、介護現場でも聞き書きが様々な形で始まっている。たとえば、高知県にある「デイサービス長老大学」では、「介護民俗学」に触発された時、二〇一五年から利用者を「先生」として聞き書きを行い、その内容を冊子にして地域の小学校に配ったり、Web上で公開したりしている。更にはコロナ禍以降、Zoomを使った聞き書きも「オンラインデイサービス」と称して展開している。

「介護民俗学」は民俗学からも介護現場からも注目していたが、様々な実践につながっているが、私自身の聞き書きも、私の置かれた状況によって大きく変化してきた。

介護現場で働き始めた当初、私は、社会福祉法人の運営する大規模デイサービスの介護職員となった。その後は入所施設の介護職員として働いたのだが、その一つの役割として、週に一日、一回につき一時間程度、個室で利用者へと聞き書きをする時間を設けさせてもらっていた。そこで聞き書きした内容は、『思い出の記』という冊子にまとめ、利用者や家族へと渡し、更に、事業所内の他の職員たちにも読んでもらったりしていた。そうしてまとめた『思い出の記』は一〇冊を超え、利用者には、

職員たちも戸惑っていたが、進めていくうちに、周りにいた他の利用者が興味を持ってきて、相槌を打ってくれたり、質問をしたりと、聞き書きに加わってくれるようになった。同世代の方や同じような経験をしている方が加わることで語り手が饒舌になるのは、民俗学のフィールドワークでもよく経験することだ。聞き書きは少しずつ盛り上がり、更に職員たちも、利用者たちの間に入って、フォローしてくれるようになった。聞き書きはいつの間にか、私と対象の利用者との一対一の形から、ダイニングにいるみんなを巻き込んだ開かれた形に展開していったのである。

聞き書きの内容をまとめる表現方法も変化していった。『思い出の記』という冊子にまとめる時間と労力がなかなかかからない中、もう少し簡単にできる方法として、はがき大の画用紙に聞き書きをまとめた「すまいるかるた」を作るようになった（詳細は、『それでも私は介護の仕事が続いていく』を参照）。「すまいるかるた」作りでは、聞き書きに参加した語り手の利用者やその他の参加者とも協力して、その場で作ったを作ってしまった。聞き書きの場も表現の場もいづれも開かれていった。したがって、聞き書きも表現もみんな協力して行うという点において、聞き手を担う職員の負担感はかなり軽減されたと思う。実際、私は講演の際には、その後半に聞き書きのワークショップを行い、四一六人のグループで聞き書きをして、かるた

にまとめていただいていたが、参加者の感想の多くは、「この方法だったら自分の施設でもできそうだ」という前向きなものだった。

5 開かれた聞き書きが対話の場を作る

一対一の閉ざされた聞き書きから、みんなで言う開かれた聞き書きへ。そして、みんなで協力して「かるた」にまとめる表現方法へ。そうした聞き書きの形の変化は、すまいるほーむにおける関係性や場に思わぬ好影響を与えることになった。聞き書きに参加した介護職員たちが利用者の人生を深く知る機会になったことはもとより、他の利用者たちも語り手の利用者の生き方に関心を持ち、その方を受け入れていくきっかけになっていった。そうして、利用者との関係、利用者同士の関係が深まっていき、互いを尊重し合う、対等な関係へと変化していったのである。

また、開かれた聞き書きを積み重ねていくことによって、すまいるほーむの日常に対話の場が生まれるようになったことも大きい。聞き書きをしている時ばかりでなく、日常会話においても、利用者同士でお互いの人生について語り合っていたり、介護職員も利用者へと話を聞いたり、逆に自らの人生の悩みを相談したりするようになっていく。更には、毎月の行事やお芝居等、何かすまいるほーむで行う時には、利用者との関係が深まる。

場は常に深刻な人手不足の状態にあり、その状況は一向に改善される見込みはない。そのため、厚生労働省は、ここ数年、介護現場に、「生産性の向上」を促進することを強く求めている。たとえば、介護ソフト、タブレット端末や見守りセンサーの導入などによるICT化を進めていくことで、情報共有を効率化し、チームケアの質を向上させていくことが必要だとされる。また、日常業務におけるムダやムラを見直し、業務の効率化に取り組んでいくことで、介護職員の業務負担を軽減し、働きやすい環境を作っていくことが促されている（厚生労働省「介護分野における生産性向上ポータルサイト」）。

このような取り組みによる「生産性の向上」で、ムダを無くし、業務が効率化でき、その分利用者と向き合う時間を増やし、ケアの質を高めることができる、と厚生労働省は唱えている。しかし、業務が効率化されることが、直ちに利用者との向き合う時間を増やすことに本当になるのだろうか。私には疑問がある。実際、二〇二四年度の介護報酬改定では、ICT化により「生産性の向上」に取り組んだ入所施設の介護職員の人員配置基準が緩和されることになった。つまり、「生産性の向上」は、一層の人件費の削減（人減らし）を促進させることにつながりかねないのだ。

そもそも、介護の現場に、「生産性」という言葉を持ち込むこと自体にも私は強い違和感を覚える。「生産性」とは、「労働、

などで話し合って決めていくというスタイルが生まれていった。

私が「介護民俗学」と名付けた民俗学的アプローチによる聞き書きの実践は、介護現場における「する／される」という固定された関係を逆転することにつながり、更には、開かれた聞き書きへと形を変化させていくことで、対話の場を作り上げていくことになった。介護現場は閉塞的になりやすく、だからこそ介護職員と利用者との関係も行き詰ってしまいうことも多いのだが、開かれた聞き書きが行われ、常に対話の場があるようになることで、利用者も介護職員も、また家族も、参加する人それぞれがつながり合っているという実感を持つことができる。そうした確かなつながりがあることが、それぞれがこれからの生きていくという希望を持つことにつながっているように思う。

そして、何より、長年生きにくさを感じていた私もまた、「介護民俗学」の実践の場であるすまいるほーむで、利用者や職員たちと対話をし共に過ごすことによって、自らが生きていくことを肯定できるようになっていったのだ。そういう意味では、「介護民俗学」の実践は、私にとっての「生きるための実践」でもあったと言えるのかもしれない。

6 介護と民俗学の親和性——効率化、生産性への抗いとして

超高齢化により介護ニーズがますます高まる一方で、介護現

設備、原材料などの投入量とこれによって作り出される生産物の生産量との比率」（『日本国語大辞典』第二版）のことであり、本来はモノを作る業種において使われてきた言葉である。人とかわる仕事である介護の現場で使うことが相応しいとは思えない。

また、現在の社会には、「生産性」があることのみ存在価値を認める風潮があり、介護が必要な高齢者は、障害者やLGBTQ、生活保護受給者の方などと共に、「生産性のない人」「社会のお荷物」として、容赦ないパッシングを浴びせられたり、社会から切り捨てられたりすることが多々あるのである。そして、更に深刻なことに、そうした社会の価値観は介護を必要とする高齢者自身をも呪縛している。彼らは、みな「人の役に立たなくなったらおしまいだ」「迷惑をかけないで死にたい」と、できたことができなくなっていく自分の老いを受け入れられずに苦しんでいるのだ。介護現場とは、そのように「生産性」という価値観で排除され苦しむ人たちが集う場所なのであり、そこに「生産性」という言葉を持ち込むことで更に彼らを否定したり、追い詰めたりにすることにつながらないだろうか。

介護の仕事の本質は、利用者一人一人に寄り添い、老いに共に向き合いながら、共に生きる希望を見出していくプロセスではないか、と私は思っている。そうして共にあるということ、自らの老いに直面し苦しむ利用者が自分のこれまでの人生を肯定し、最期まで生きていくとする意欲やそれを支える希望を

持てるようになってくれればいい。だが、それは決して効率化
できることではない。時には心が揺れ動き、立ち止まったり、
後退したりしながらも、それでも利用者と共にあり続けるとい
う、時間も労力も人手もかかるのが介護の仕事なのだ。

一方、人の暮らしや生き方を研究し、向き合おうとする民俗
学の聞き書きも、また、「効率化」や「生産性の向上」とは対
極にある営みと言えないだろうか。聞き書きは、語り手との関
係性を少しずつ築きながら、そして、相手の状況に感じながら
進められていく。だから、何度も足を運ばなければならぬし、
聞きたいテーマから外れた話に展開することもよくある。時に
は聞き書きそのものを中断せざるをえなくなることもある。効
率的に話を聞こうとしても、決して上手くはいかないし、研究
に値するだけの十分な内容を聞くことはできないだろう。また、
そもそも民俗とは、様々な「ムダ」や「ムラ」を包摂すること
で社会をより豊かにするものとして、人々の間に継承されてき
たとと言える。そうした民俗を研究の対象とする民俗学もまた、
「効率化」とか「生産性」にはなじまない学問ではないだろうか。
今から思えば、私が民俗学を学び、研究するようになったの
は、そうした近代的な合理主義や効率性のような息苦しさから
距離を置いてできる学問であり方法であったからであるように
思う。そして、民俗研究者としてフィールドでの聞き書きを非

効率的に不器用にやってきた私が、介護現場でもまた、ほとん
ど何の抵抗もなく、自然に聞き書きをするようになったのは、
この介護と民俗学（の聞き書き）とが共に「効率化」や「生産性」
になじまない、もっと言えば、許容しないという点において、
親和性を持っていたからではないか。
そうなのだ。介護も民俗学も「効率化」や「生産性」を「許
容しない」のだ。だからこそ、私は、これからも、「介護民俗学」
の聞き書きを続けていく。それは、介護の仕事に求められる「生
産性の向上」へと、そして、「生産性がある」ことのみに価値
を置く世の中の風潮へと、抗うための実践でもあるのだ。

参考文献

- 回想法・ライフレビュー研究会編『回想法ハンドブック——Q&Aによる計画
スキル、効果評価』中央法規出版、二〇〇一年
島村恭則編著『現代民俗学入門——身近な風習の秘密を解き明かす』創元社、
二〇二四年
六車由実『驚きの介護民俗学』医学書院、二〇二二年
——『介護民俗学という希望——「すまいるほーむ」の物語』新潮文庫、
二〇一八年
——『それでも私は介護の仕事を続けていく』KADOKAWA、二〇二三年

（むぐるま ゆみ・介護民俗学）

繰り返すことの民俗学

日常・クイア・強迫症

辻本侑生

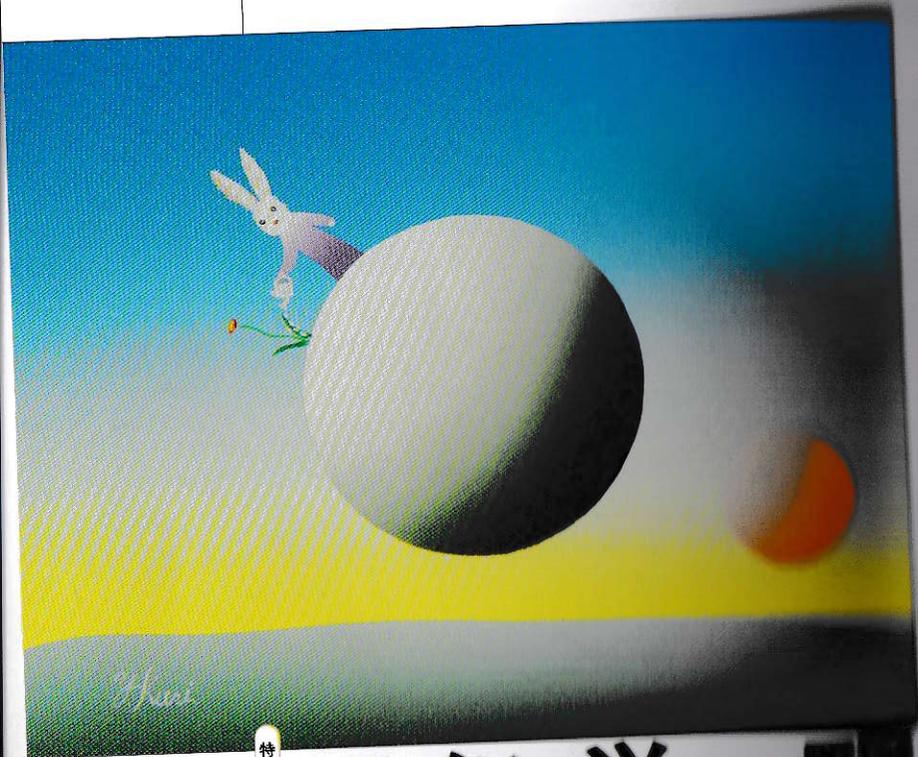
1 日常の暮らしと繰り返し

民俗学者の坪井洋文は、東京都三宅島で焼畑農業を営んで暮ら
してきた七七歳の女性から、「わたしは長生きをしすぎたために、
こうしてまだ焼畑を作っているのです。ふつうは、ここを三回ま
われば一生は終るのに……」（坪井 1986: 230）、という話を聞き取
っている。同じ土地を毎年耕作する水田や常畑での農業と異なり、
焼畑は土地を順番に切り開いて火を入れ、作物を育てる。そして
十数年後に地力が回復すると、再び同じ土地をまた切り開いて焼
畑として利用するのである。この坪井が話を聞いた地域では、大
畑になってから、一五年ほど周期の焼畑を三周（四五年）する
人になってから、「一生が終る」と理解されており、だから女性は「長生きをし
すぎた」と語っていたのだ。日本全国の中山間地域の人びとが高

度経済成長期まで当たり前に営んできた焼畑農業には、十数年単
位の植生の回復と利用の繰り返しが含まれている（中略、鈴木ほか
編 2022）。

自然とともに暮らす人びとの日常においては、焼畑のように人
びとの側が自然に働きかけるのではなく、自然の側から働きか
けてくることもある。その代表例が津波である。民俗学者・地理
学者の山口弥一郎は、数十年に一度、大津波に襲われる三陸沿岸
を「津波常習地」と名付け、三陸沿岸の人びとが高台移転と海の
近くへの復帰を繰り返しながら、津波とともに暮らしてきたメカ
ニズムを探究している（山口 1978: 内山・辻本 2022）。大きな津
波が発生するのは数十年に一度であるが、津波によって命を失っ
た人びとを思い出し、弔う日は毎年やってくる。一九三三年の昭
和三陸津波のあと、三陸沿岸の人びとは、津波の発生した三月三

民俗学の現在



民俗学の現

特集

寄稿

青井哲人
廣田龍平
伏見裕子
六車由実

ファイリッブ・ブローム 著／佐藤正樹 訳
縫い目のほつれた世界
小氷期から現代の気候変動にいたる文明の歴史
―六世紀ヨーロッパを襲った小氷期による飢饉・疫病・戦争を乗り越え、人々は近代社会の扉を開いた。新たな文化と思想が開花する革新の時代を描いた歴史絵巻！ 3960円

ニール・ブレナー 著／林真人 監訳、玉野和志、中澤秀雄、齊藤麻人、平田周、金澤良太 訳
新しい都市空間
都市理論とスケール問題 地理学・社会学・政治学・環境学・建築学を横断するスケール理論や惑星の都市化の理論を解説・展開する注目の都市研究者の代表作。 5170円

水野的 著
日本人は英語をどう訳してきたか
訳し上げと順送りの史的研究 日本英語翻訳はいかになされてきたか。「訳し上げ」に抗して「順送り」訳の有効性を打ち出し、訳出技法論に終止符を打つ画期的書。 5170円

中村高朗、虎右直子 編著
記憶と芸術 ラビリントスの罫
「記憶」の断片から「芸術」のはじまりを紡ぎ、人間の根源的な営みを解きほぐす。美学、文学、美術史、演劇等をめぐって第一線の論者が織りなす知の饗宴。 3520円

法政大学出版局 〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3 https://www.h-up.com/ TEL 03-5214-5540 / FAX 03-5214-5542 表示価格は税込です

辻本侑生、島村恭則 編著
辻晶子、三上真央、大田由紀、廣田龍平 著
クイアの民俗学
LGBTの日常をみつめる
性的マイノリティたちが、自分たちを指し示す言葉として用いてきた「クイア」。民俗学の視点でLGBTと呼ばれる人びとの日常的な営みを捉える七つの論考集。

榎野浩一、pha、佐藤文香 編著
おやすみ短歌
三人がえらんで書いた安眠へさそってくれる百人一首
安眠がテーマの短歌百首に、人気歌人らが軽快なエッセーを添える。「読んでいると本当に眠くなる」とSNSで話題に。

藤本稔彦 著
まちづくりの思考力
暮らし方が変わればまちが変わる
まちづくりを考える糸口を、地元学、リサイクル堆肥化、小水力発電、ケアの思考といった様々な切り口からたぐり寄せ、みずみずしい感性で論じる。

近野 究極の学び場 京大吉田寮
共々暮らすことが、最高の学びだ！ 日本最古の学生寮で過ごす学生のほか医師、起業家、研究者、作家など、各界で活躍する個性的な卒業生らが寮の魅力をとっぷり紹介。

実生社 〒603-8406 京都市北区大宮東小野塚町25-1 https://mishosha.com/ TEL 075-285-3756 表示価格は税込です

現代思想
la revue de la pensée d'aujourd'hui
05

昭和48年4月12日 第三種郵便物認可
令和6年5月1日発行(毎月1日発行)
第52巻第6号
雑誌63723-48
Printed in Japan
定価1760円 本体1600円(税10%)

ISBN978-4-7917-1463-6
C9410 ¥1600E

